

新 紹
介 刊

遠藤 彰著

『心の音楽—音楽と大学生活—』

(鳴滝書房・発行一九九〇年六月
B6判・一七四頁 二、〇六〇円)

著者は学生時代(一九四〇年代)、キリスト教神学を志すということ、キリスト教音楽に投ずることも、「二つの努力はいずれも政治や軍事の世界を突き抜けた真に意味のある世界を開示してくれるであろうことを信じていたからである。そしてこの期待は誤ってはいなかった。」(はじめに)と述べられている。あの暗い戦争突入の折、著者のこの確信こそ、本書の出発点ではなからうか。

更に「宗教や音楽の目ざすものは、聖な

For some in ancient books
delight; Others prefer what mod-
erns write: Now I should be
extremely loth. Not to be thought
expert in both.

るものや美なるものや永遠なるものである。(中略)むやみに技術や技巧の精緻さや新奇さを競うのみで内容には貧困な音楽とは異なるものであって、人間存在そのものに訴えかけ、神への讃美、生きる喜び、人間相互の愛に共鳴させ感動をよび起こすような音楽であるはずです。こういう音楽を私は『心の音楽』とよびたい。(あとがきより)と結んでいる。

本書は、一貫とし流れている「キリスト教と音楽」というテーマを、同志社大学の神学部の教授在職中に大学生活を通して、チャペルアワーでの奨励や、小論文、グリー・クラブとともに歩まれた著者の体験、海外演奏旅行同行記、音楽についての短章、としてまとめられたものである。

著者は、アントン・ブルックナーのことについてかなり詳しく「(宗教と音楽)」の中で書いている。あの興奮するようなブルックナーの合唱曲の各声部の動きはあの美しい静寂なハーモニーに必ずといっていい程、長い休止符がある。これは恐らく会堂の残響効果をねらった音の空間を意識したものであろうが、このブルックナーの宗教

音楽は、人々を宗教の世界に溶け込ませてしまう。モーツアルトの「レクイエム」もしかりである。

同志社グリー・クラブのかつては学生指揮者であり、長年その顧問を勤められた著者は、この合唱団を通して、音楽の持つ「言葉の意味」だけに留まらず、心の深い所にある「内面性への共感とその表現を大切にしたい」(五十六頁)と語っている。

著者の聖書のみならず、言語、芸術、文学、哲学にわたる研究・興味が本書に凝縮されており、同志社の精神に満ち溢れ、大変に読みやすく、わかりやすい文章で、著者のお人柄が伝わってくる。グリー・クラブのメンバーのみならず、一般の同志社人にも是非一読をお勧めいたします。

津田能人(高等学校教諭)

斎藤 勇著

『イギリス中世文学の聖と俗』

(世界思想社・発行一九九〇年五月
B6判・二六〇頁 一、九五〇円)

本書は、博士論文をもとにした英文の著書を除けば、著者の三冊目のものである。関心は一貫して中世のキリスト教、すなわ

ち、聖の世界に向けられているようで、博士論文もラングランドの『農夫ピアズの夢』の中の免償場面についてであった。しかし、著者の聖への関心には、聖ならざる世界の姿が見え隠れする。一冊目の『中世のイギリス文学』には「聖書との接点を求めて」という副題が添えられているが、二冊目の『カンタベリ物語』の副題は「中世人の滑稽・卑俗・侮俊」とあり、俗の世界への傾斜が強まっていることがわかる。従って、三冊目の本書で「聖と俗」とはつきり銘うたれていることも当然の結果であろう。例えば、I章の説教文学についても、著者は、広い学識と豊富な資料に加えて、説教を聴く俗の側への言及も忘れない。「退屈な」はずの説教についての著者の論が、退屈でない所以である。

III章の中世文学の女性性は初出のものだが、中世の女性観の様でないことが、「エバとマリヤと貴婦人と」という題に明快に表われている。「EVA」は逆にすると「AVE」となり、マリヤのことを指すように、中世人は、「罪の原因」は逆に「救いの原因」に変わり得る、とみたのである。

著者は、作中人物の性格や心理分析をも得意とし、人物の言葉使いやちよとしたしぐさをも見逃さない。チョーサーの描くクリセイダについても、彼女の魅力は的確にとらえられている。語り手チョーサーが彼女の魅力の虜となつていように、失礼ながら、著者もまた、チョーサーのクリセイダに少なからず心動かされておられるようである。

チョーサーは言葉のアイロニーやその多層の意味を自由に駆使した詩人であるが、著者もまた言葉の魔力にひかれており、本書における「グロウプ」(groupe)という語へのこだわりにもそれがみられる。「良心を吟味する」という意の他に、著者がこれを「まさぐる」と訳す時、この語は卑猥な色合いを帯びてくる。「グロウプ」する托鉢修道士自身の聖の名の裏にある俗な側面が浮き彫りにされてくるのだが、著者の訳語は当然そのことを頭においてのことである。この語に限らず、本書を通じて読者は日本語の妙味を堪能させられる。明治の訳詩集の清新流麗な言葉使いから江戸っ子のべらんめえ調まで、雅俗両語をあやつれる著者の

才が、特に引用の訳などにいかんなく発揮されている。一読をお勧めしたい。

二村宏江(大学文学部教授)

河野仁昭著

『風蘭』

(同朋舎出版・発行一九九〇年七月
B6判・一〇一頁 一、五〇〇円)

これは河野さんの五冊目の詩集である。

第四詩集の『村』から十年がたったところで、還暦を迎えた著者が一つの区切りをつけるつもりで上梓したのである。『村』を支えていたのは東伊予の生まれ故郷と、肉親たちに対する限りない追憶の情であったし、『風蘭』でも散文詩のいくつかはその線上に並ぶものであるが、それに、未来を窺う姿勢が加わった。それはすでに何人かの孫を持つ祖父としての詩人の新しい境地なのである。風蘭というのは暖地の樹上に着生する植物で、夏に糸状で湾曲した白い花をつけるという。故郷の家の柿の幹に生えていたのは、昔祖父がどこから持ち帰ったものだったという。ほけが進んだ母を見舞いに帰ったとき、詩人の甥が竹竿で風蘭を柿の木から落としてくれた。「婆ちゃん

のお土産じゃ。庭の木にくくりつけといった
ら 来年はきれいに咲かいの」といって風
蘭の塊は無造作に詩人の手に置かれた。二
年後に母は死ぬ。京都の家の庭に縛り付
ておいた風蘭は見事に繁殖した。けれども
「目に痛い白さで咲く細い花弁のむれは甥
と私が乗った車を追いかけてきて ふたこ
と三こと聞きとれぬ叫び声をあげた母の
ほつれた白髪頭の風情で 今年も満開の季
節をむかえた。」この母は「餞別」では、初
めて都会に出ようとしていた息子の後を、
髪ふりみだして二キロの道をバス停まで
「家中の小銭をかき集めて 狂女の姿で追
ってきた」その母でもある。「風蘭」も「餞
別」も心につきささる詩であり、鎮魂歌で
ある。

娘と息子の家を交互に訪ねて、孫のお守
りをすることに生きがいを感じている妻は
電話で声はずませながら、夕食の指示を
してくれる。だが、詩人は「指示がなくても
酒の爛だけは忘れずにする。」まるで日常
生活の条件反射のように。だが、詩人は孫
たちに対して深い、静かなメッセージを用
意している。「焚火」という詩である。「炎

はどうしてこんなにきれいか／教えておい
てあげよう／この色は／生まれたてのこ
の地球を恋しがって／なにもかも／もの
無にかえた色だ／だから もう／無くさ
れることではきれいななくなつた者
しか／炎のそばへは／近づいてはいけな
い」

沢田 閏著

北垣宗治（大学名誉教授）

『別れ——沢田閏作品集』

（編集工房ノア・発行一九九〇年六月
B6判・三一六頁 二、〇〇〇円）

——聖なる酔っぱらいの一伝説——

会がある。なんとなくその名残りを惜ん
で二次会、三次会と纏綿としていううちに、
終電車の時刻はすぎ、ことは明け方に及ん
でしまう。たつた一言の別れの挨拶を立派
にやつてのけることができないために、そ
れがどんな高い犠牲を払わせるものになる
か。」

大抵の人ならあつさり「じゃあね」と手
をふれば済むこんな問題が、かつての祇園
のジュンちゃん、ネオン街のベビーギヤ
ングと呼ばれた人には、どうやら生涯つきま
つた。

かくして沢田さんは、二十数年来、脾臓
病と闘いつつもアルコールとの縁たち切れ
ず、ついに昨夏六月、五十九歳の若さで亡
くなった。遺族の痛恨はしのぶに余りある
が、緩慢なる覚悟の自死とすらいうべきも
のであつたらう。

この遺稿集は、フランス語教師という本
業のかたわら折にふれ書きためられたエッ
セイ、若干の小説と詩、「日本小説を読む会」
会報の書評を死後編集したもののだが、全体
が沢田閏という人間を赤裸に示す私小説集
といった趣きがあつて、戦後の世相を生き
ぬいた一知識人の、決して挫折とは無縁で
ない生の形が、織田作ばりのユーモアのあ
る文体をとおして悲喜こもごもに切なく浮
び上ってくる。生の表層との戯れを旨とし
てスマートに生きる当世新人類には、この
ヤンチャぶり、この放蕩無頼はもはや無縁
のこと。それを時代の流れ、世代の差と一
言で片づけることもできるのかも知れな
い。が、果してそうか。

酒場から酒場へとハシゴ生活に明け暮れ
る者には、昼間の身すぎ世すぎの人間関係
の屈託を断ち、人恋しさというどこか母胎

帰に似た甘えのうちに（だから、そこにはいつもママがいるのだ）自己の本性に立ち戻ろうという、彷徨のさなかにも、ある探求の気配がある。そこでこそ人生の意味が探れるのかも——という期待が彼をひきずってゆく。

経済大国の太平楽の表層にあそぶ表現のアクロバット、文学部唯野教授などには、これはほとんど対極の世界である。しかし唯野教授の足掻きもまた究極の虚しさにおいて変りはない。意味の世代に属する自称「無思想家」沢田間が己が身とひきかえに求めたものが、やはり虚しい影にしかすぎなかったとしても、その彷徨がきざんだ生の形は、なぜか奇妙になつかしい。貧しかった日本の庶民の生の危うさ、そんな青春を生きぬいたひとりの聖なる酔っぱらいへの、この郷愁は捨てがたい。

山路龍天（大学文学部教授）

安森敏隆著

『幻想の視角——斎藤茂吉と塚本邦雄——』

（双文社出版・発行一九八九年十二月）
B6判・二〇七頁 二、五〇〇円

著者にはすでに茂吉、邦雄に関して『斎藤茂吉幻想論』（桜楓社・一九七八年）『創造的塚本邦雄論』（而立書房・一九八七年）の著作があり、本書はこれら二著が止揚されたものである。「あとがき」には明快にその意図が述べられている。第一章「茂吉と邦雄」で「年来のモチーフであった茂吉の写生論と邦雄の幻想論のアマルガム、ひいては近代短歌と現代短歌の止揚をこころみ」、第二章「邦雄における『茂吉』の位相」では「茂吉秀歌」全五巻を「鑑賞、批評」し、茂吉を「新しく読みなおすこと」というものである。

「写生」と「幻想」、茂吉と邦雄、およそ両極にあるとみられる両者のどこに共通項があるのか。邦雄が茂吉に「近代短歌の『金字塔』」をみ、「写生」と称しながら実は「幻想」をも駆使する歌人であったことを見事に剔抉した点、「幻想」とは「写生」や現実に対立するものでなく、「写生」や現実を一度はくぐりぬけ、その目の見える現実部分の彼方のところを描出する」点にある

とする。

著者の方法はまことに実証的である。「幻想」を標榜し、実作者としてまた選者としても活躍する著者にして、むしろ意外の感さえある。たとえば第一章三節「写生と幻想」に面目が躍如としている。

『遠遊』中の「伊太利亜の旅」にある「ペンペイに同胞ひとり死せること知りてより琅玕洞をおもひ止まり居る」の一首。邦雄に触発された著者は「同胞」の語を実証していく。『遠遊』中の「同胞」の語の検証から「手帳」の検索へ。「同胞」らしき客死者」にたどりつくが彼は別人である。次は滞欧随筆をしらべる。その中で「ナポリ」詠の歌が滞欧随筆の一つ「ナポリ遊行記」と見事に呼応していることを解明する。「同胞」は「人から聞いた話の中の」「無名の『旅人』」であったこと、「同胞」の死と「琅玕洞」の見物をやめたことに因果関係のないことが明らかに。著者は茂吉の写生が「へうそ」は言わぬが「事実」をはるかにつきぬけた仮構の「幻想」を形象化している場合が往々にしてある」と指摘する。綿密な実証からの結論である。

注文は「……ものではありえなかった」といういいまわしの頻出からくるのか、ギクシヤクした表現、あるいは少し「低音」の方がよいと思うところもある。これも著者の三〇年近い茂吉、邦雄への「ほれこみ」の深さであろう。とまれ、佐藤泰正氏が推薦の帯文にいう「著者の分析考証はまことに犀利で緻密だが、それを越えてここにはまざれもないすぐれた歌人・批評家としての著者の面目躍如たるものがある」が、当を得て妙なる評である。なお巻末には邦雄の『茂吉秀歌』五百首選一覧が付されている。

國末泰平（立命館大学非常勤講師）

金田民夫著

『日本近代美学序説』

（法律文化社・発行一九九〇年三月）
A5判・二三五頁 二、七八二円

本書は、著者が今春三月をもって本学文学部を定年退職するに当って、ここ数十年間にわたって書きついだ諸論考を集め、これを表題に掲げられているような視点のもとに再構成したものである。各論文はすでに学会誌や学内機関誌などに独立した形で発表されたものであるが、刊行に際して改

めて各々の問題連関に関する系列的な説明が、「序文」で示されている。構成は基本的には二部に分かれている。

第一部「明治期における日本美学」は、西周以降の美学史の歩みから、フェノロサ、坪内逍遙、大西祝、元良勇次郎、中川重麗らの諸業績をとりあげ、西欧近代美学がわが国に導入され、幾多の曲折をへて定着していく過程が解明されている。とりわけ大西、元良といった明治期同志社がうんだ先輩たちの美学思想に対して、学術史的にも高く評価すべきことを、細緻な分析をふまえて提言している論考や、さらに京都の地に、中井宗太郎（京都絵専）や深田康算（京都帝大）が登場するに先だって、ジャーナリストイックな面で啓蒙的な美学研究者として活躍していた中川が存在を、美学思想史の上に始めて浮き上らせようと努めた研究などは、著者の独自の面目を語っている。「日本の伝統的な美意識と外来の近代美学との衝突、葛藤、融和」の諸場面が、丹念な資料分析と着実な思索とに裏づけられて探りだされているのである。

第二部は「日本の美意識と自然感情」と

題されている。これは、著者が永年専門分野として諸成果（シラーの芸術論、『美学』における自然と現実」など）を挙げてきたドイツ観念論美学の見解にそのつど立ちかえりつつ、自然にかかわる美意識の問題をとくに日本（東洋）の特有の自然観照の在りかたに関連づけて論究したものである。

自然美や風景美といった、自然感情にねざした独自の美意識の在りように、美学理論としての基礎づけをどのように与えていくことが可能かという点に、著者の関心は収斂する。ここでも大西克禮、矢代幸雄、和辻哲郎などの諸先達の見解に「つらなりつつも、日本美学・東洋美学の成立の可能性そのもの」に対峙して独自の視界を開こうとする美学者としての創意が隠されている。統論が期待されるところである。

なお第三部として詳細な「明治美学史年表」が付せられていて、第一部の論考を補完する形となっている。

郡 定也（大学文学部教授）

松本通晴著

『農村変動の研究』

(ミネルヴァ書房・発行一九九〇年二月)
A5判・五五二頁 八、七五五円

大学の社会的使命が研究と教育にあることは今更いまでもないが、わけてもその研究機関としての機能にこそ、大学の価値が認められねばならないことは、案外忘れられ勝ちである。受験生の質とか数が大学の評価を決定するとするのは、ひとつの通念にしか過ぎない。

研究機関としての機能の基盤が、個々の教員の研究能力にあることは勿論であるが、それに加えて、共同研究体制の存在とその持続性にも大きくかわりがある。松本通晴氏の本書を通読し、まず感じたのはこの点である。すぐれた社会学者の手になる本書が、社会学の分野で築き上げられた蓄積の上に成っているものであることは当然のことであるが、同志社大学人文科学研究所の研究組織の貢献もまた大きいものがある。故吉川秀造先生を中心にスタートした封建制研究グループは、その後、故秋山國三先生、故竹田聰洲先生と指導者の交代を重ねながら着実な研究を積み重ねて来た。その成果のひとつがここにあるといっ

てよい。

松本氏の研究者活動は戦後農村の民主化の過程に触発されたことから始まり、爾来三十数年にわたり日本農村の研究にその重点を置いて来ている。その問題意識は、農地改革によって創出された「自作農体制の村」、ついでその後経済の高度成長期を通して「過疎の村」へと変動して行くムラ、このような農村変動に対して、これまで使われて来た分析概念「村と家」がどこまで有効であるかということにある。そうして、その研究過程から生じた発想の転換として「戦後農村の変動を村落の変質および家・家連合の解体の図式からとらえ直すところみ」を、あらたに一つの仮説として提示したいとする。

氏の研究姿勢の特徴は、まず何よりも現実認識を大切にするとところにある。ついで、研究史とその理論の生産的継受、そして実態調査へと進んで行く。本書の序章もまた、「現代の農村問題」から説き起し、次に第一部「農村変動の理論」と第二部第一章で研究史と理論を取り扱い、第二部「近畿家格制村落の変動」で近畿農村の「家格制の硬

さ」、第三部「瀬戸内村落の変動と地域社会の形成」で瀬戸内農村の地主制と工業化の影響についての周到な実証的研究を提示している。

今日、日本農村は決定的な転機に立っているといわれる。日本社会の行方を知るためには、農村社会という根源から考えなければならぬことを、あらためて気附かせて呉れる書物である。

藤田貞一郎(大学商学部教授)

望田幸男・田村栄子著

『ハーケンクロイツに生きる若きエリートたち』(有斐閣選書一四九)

(有斐閣・発行一九九〇年一月)
B6判・二八〇頁 一、七〇〇円

かつてトーマス・マンは、青春性にドイツ性の象徴を見た。現実離れた未熟な観念性(非政治性)を特色とする青春性は、ドイツ精神史上独特の位置を占める。

教育社会史と青年運動史をドッキングさせつつドイツ近現代史の青年の実態を浮き彫りにした本書は、青年の問題を正面から

とり上げることによって、このドイツ性の核心に迫る。

第Ⅰ部では、十九世紀からワイマル期までのギムナジウムを中心にした中等教育の発生・実態・メカニズム・機能が就学率や社会的出自や階層別大学進学状況などの豊富な統計資料を基に説明され、中等教育界が工業化や大衆化やナシヨナリズムの波を受けて変貌しつつも、他の諸学校に比してギムナジウムの相対的優位性がワイマル期まで維持されてゆく過程が明らかにされる。

ギリシア・ラテン語教育を主眼とするこのギムナジウムでは、数学や自然科学は軽視され、目前の政治や社会問題には目を閉じて遠くプラトンやキケロに思いを馳せる非政治性が教養の第一義とされる。現実から切斷されたこの超俗的な若者たちは、一方では、この社会的登竜門のギムナジウムでエリート意識や気負ったメシアニズムに駆られる。だが他方では、二六時中ひからびた古典を強要されて、このいわば生気のない「格子なき牢獄」で灰色の青春をかこち、生にもだえ、ワンダーフォーゲルのよ

うに、学校や体制を脱して大人文化否定の対抗文化をつくりとうとする。狭い空間の中に閉じこめられてうつ血した生が爆発の機会をうかがう第一次大戦の折の塹壕の中の生活にも、これと似た心情があった。

第Ⅱ部では、シュテークリツ・ギムナジウムの若者が十九世紀末にはじめたワンダーフォーゲル、一九一三年ホーア・マイスナーでの自由ドイツ青年集会、大戦後の同盟青年やナチス学生同盟にいたる青年運動史がひもとかれ、その心情や行動が描かれる。大戦の砲火によってギムナジウムの優雅な「教養」が吹飛び、ヴァイタリズムに一層拍車がかかる大戦後の青年運動は、戦前の感傷的な山野の逍遙とはちがった強い政治色と軍隊調をうち出し、結束を誇る共同体思想を神話化することによって、戦前のそれに決別する。だが強い政治意識にめざめながらも、「国」のローマン的黙示録が示すように、その心情や発想はいぜんとして精神主義的であり、非政治的だった。これらの多くはナチスではなかったが、結局は、政治の中に徹底的に生きるヴァイタルな政治主義を掲げるナチス学生同盟に同調

してゆかざるを得なかった。

本書の主要なテーマは、若き非政治的教養人の政治行動の問題である。詩人が判事に一変し、思想家が官吏に帰結する。ゲーテがヒトラーへと変貌してゆく皮肉なドイツ性の問題を本書は提示しているのである。

八田恭昌(天文学文学部教授)

黒木保博著

『フロストバレーの子どもたち』

(ミネルヴァ書房・発行一九九〇年二月
B6判・二八〇頁、一、八五〇円)

筆者の黒木保博助教授は、社会福祉学の中でも集団援助技術論を専攻している。そして本書は、東京・ニューヨークYMCAが主催している「サマーキャンプ」について、専門の立場から論じたものである。キャンプについて触れられた書物は多いが、いくつかの点で本書は他に見られないユニークな内容となっている。

第一は対象となるキャンパーやその目的のユニークさである。本キャンプはニューヨーク及びその周辺に在住の日本人青少年

を対象としている。その上で、親の転勤等に伴う海外生活が、子供達に与える不適応問題を解決していこうとするものである。

国際化社会の本格化に伴って、「帰国子女」の日本への再適応の問題が注目されるようになってきている。しかし、日本とアメリカの機関が協力して、アメリカの地で専門的援助を行なうという本キャンプのスタイルは画期的であり、注目に値するといえよう。

通常のキャンプについての書物との相違点として、第二にあげられることは、本書が単なる「楽しいだけのキャンプの紹介ではなく」(7頁)、リーダーシップトレーニングの様子についての相当詳しい分析・報告が載せられていることである。

「キャンプ」という言葉を聞くと、自分達が野山や海でテントを張り、自由に生活するといった形態のものをイメージすることが多い。しかし、実際にYMCA等の各種社会教育団体や福祉機関が実施する「キャンプ」は、組織キャンプといわれ、綿密なワークシート・ニング、評価、スーパージョ

ン等に伴うものでなければならぬ。そして、本書の半分以上は、キャンプに参加するリーダー達がどのようなトレーニングを受けたかについての報告や、キャンプにおける各リーダーの記録とそれへの他リーダーの反応、スーパージョのコメント等からなっている。

実際に組織キャンプに関わる者にとつては、この第三章部分が最も魅力あるものとなるだろう。評者も障害児療育キャンプに関わる者として、大いに学ぶところがあつた。リーダーが子供との関わりを日々記録に残し、それについてスーパージョがコメントしトレーニングしていく。そのプロセスが、「ゆうき君とはるき君の喧嘩」「食事当番をはずされたことへのやすてる君の涙の抗議」といった現実の記録にもとづいて展開されている。

日米YMCAによる、海外生活中の日本人青少年キャンプの紹介としての価値と、記録―評価―訓練という福祉・教育に不可欠なシステムが備わっている「実践」がいかに大きな効果をあげるかについて知らせてくれるという価値の二つの意味を持つ本

書は多くの読者を持ちうる書であろう。

辰巳和弘著

小山 隆 桃山学院大学専任講師

『高殿の古代学―豪族の居館と王権祭儀―』

(白水社発行・一九九〇年二月
四六判・二六〇頁 三、八〇〇円)

本書は、著者の長年に亙る古代学的な地域史復元研究を土台に、古墳時代の豪族居館とその祭儀の実態を究明しようとした書き下しの労作である。第一章「古代豪族の居館とその性格」では、上毛野地方最大の勢力を持つ有力首長の居館遺構である三ツ寺I遺跡(群馬県)に注目し、古墳時代の居館の性格と首長像を描く。同遺跡が中央柵列で分割されるのは居館の機能分離を示すもので、南区は首長による地域王権執行区画(ハレの空間)、北区は首長の私的空間(ケの空間)と説き、さらに同遺跡の主の奥津城と推定される保渡田三古墳の形象埴輪配置より、首長祭儀―聖水に象徴される国魂を受く―と。政治的支配者としての首長像を復元する。本章では同遺跡から得られ

た知見をもとに家屋文鏡の再検討もおこなわれる。

第二章「形象埴輪と古代王権祭儀」では、古墳に立てられる形象埴輪―高床式家形埴輪・人物埴輪を意味付ける。美園古墳（大阪府）出土の高床式家形埴輪は新嘗や首長権継承儀礼が執行される建物を表現したもので、さらに人物埴輪を中心とする形象埴輪（首長・巫女・武人・盾・家）の配置は王権祭儀を具現したものと論じる。形象埴輪の組合せは関東・大和地方にも共通して見られ、古墳時代における地域王権が早期から共通した祭式と理念に裏打ちされていたことを推定する。

第三章「神社建築の創造」では、長瀬高浜遺跡（鳥取県）にある三棟の大型掘立柱建築跡が考察される。各地の出土例を勘案して、その祭儀用建築としての性格を説き、そして復元される三棟の高床式建物の造替より、京都の歴代遷宮制と神社の式年替宮制の關係にまで論及する。また、同遺跡の棟（SB40）は一五メートルを超える棟高を持つ高床式建築で、首長権力を誇示する「ハレの空間」の中心的建物としての性格

格を持ち、その思考は古代出雲大社本殿建築に受けつがれているとする。

第四章「高殿と古代王権祭儀」では、「記紀」「万葉集」「風土記」に見える「タカドノ」（高殿・高台・楼閣）表記に注目し、タカドノ＝高床の大型掘立柱建築という比定より、その伝承記事の分析を通して、タカドノは国見・鹿鳴聴聞・ウケヒ寝・夢占い・新嘗・首長権継承の王権祭儀が行われる場所であることを論述する。

豪族の居館遺跡から起筆し、その復元、さらに首長祭儀の実態と大和王権の祭儀との関連までが説き及ばれるのは、考古資料のみならず、文献史料を猟渉し葉籠中の物とされる著者の奥深い力量を示すものであり、著者の言われる「古代学」の手法の成果であろう。味読をお奨めしたい。

加茂正典 京都精華女子高等学校教諭

小川光暁著

『昔からあつた日本のベッド』

―日本寝具史―

（エディツション・ワコール・
発行一九九〇年四月
A5判・二〇三頁 二、八〇〇円）

著者にはすでに『寝所と寝具の文化史』などの著書があるが、これは、前著以後、その時々書かれた論稿を中心に、新たに編まれたものである。表題の一章をはじめとして、以下、古代から現代まで、寝具に関するさまざまなトピックを集め、興味深く、読みやすい本に仕立てている。

目次を覧してみると、古代から現代までの寝具史の通史の形をなしているが、読者は興味を引かれたどのトピックからでも気軽に読み始めてよい。そして、読み進めるうちに、日常生活の中に溶け込んでいて、ふだん見過ごしている事柄のうちにさまざまな興味深い歴史的事柄が潜んでいることに驚かされるであろう。

タタミの上にフトンを敷いて寝る、というのが日本人古来の就寝風俗であったと思ひ込んでいるのが一般的通念であり、ベッドなどは西洋から明治以後に持ち込まれたものであるかのように思っている人も多いが、天平時代に、聖武天皇はベッドを使っていた。そしてそのベッドは、正倉院の宝物の一つとして今日に伝えられている。―そのことは、すでに前著でも書かれていた

ことだが、著者の想像はさらにふくらむ。ベッドの使用は聖武天皇だけの特別なものであったのかどうかと。

タタミの上にフトンを敷いて寝るか、あるいはベッドを使うかは、結局住宅建築の構造にかかわる問題である。奈良時代の宮殿建築が中国式で、したがって机や椅子、そしてベッドを使っていたとしても、それは単なる当時の舶来文化であつたのかどうか。それなら、弥生時代以来の竪穴式住居ではどうだろう。土間に「藁解き敷いて」寝ていたのだろうか。アメリカインディアンの掘立て住居にもベッドのしつらえはある。似たような構造の竪穴式住居にもベッドがあつたのではなからうか。著者の想像は、その後見事にベッドのある家形埴輪の発見や、弥生の住居遺跡の発掘結果によって確かめられていく。

以上が表題となつている「昔からあつた日本のベッド」のあらましであるが、そのベッドを示す「床」が、なぜ、「ゆか」でもあり、さらには「床の間」ともなるのか。と問題はつきつきに展開して行く。秋の夜の格好の読み物としてお勧めしたい。

森 浩一著

笠井昌昭 大学文学部教授

『交錯の日本史』

(朝日新聞社・発行一九九〇年三月
A5判・一九七頁 二、五〇〇円)

『アサヒグラフ』に連載されて好評だった『交錯の日本史』が、待望の単行本になった。これは驚くべき書物である。森浩一氏(同志社大学教授・考古学)の多数の著書の中でも、姉妹編の『新・日本史への旅』(朝日新聞社刊)とともに、特筆されるにたるユニークさをそなえた書物である。

著者がここで語るのは、従来の通説的な日本史ではない。「それぞれの地域が、他の地域とどのように関連しているのかという空間的な交錯の妙とか、一度すたれて失われたはずの伝統が、形をかえて根強くのこっていたりする時間的な交錯の妙」こそ、本書のテーマである。ここに描かれるのは、通説という名の先入観への挑戦であるといつてもいい。

京都に生まれ育つたわたしには、東山の八坂の塔は子供のころからのなじみだ。しかし、著者のなめらかな語り口につて、

心礎のうえに心柱がのる状況を観察できる日本唯一の塔がこれである、と解説されるとき、自分は八坂の塔を本当に知っていたのかどうか、おもわず自問してしまう。東寺の弘法さんの市のことも、よく知っている。しかし、塩を通じて東寺と愛知郡がむすびつき、その愛知郡にも弘法の市がのこっていると聞かされるとき、わたしの知っていた東寺にはない、あたらしい視点が開けるのを感じる。そのほか、銅鏡を写した姫路の磁器、鯨の骨でつくった大阪の橋、縄文の石皿に鹿の生首をのせたありさまを描く秩父の絵馬、「日本將軍」を名のる青森の豪族……等々。ページをめくりながらわたしは、いつしか交錯の国の迷路に迷いこみ、どきどきしながらそこを探索している自分に気づく。

もちろん、本書に選ばれた内容は、あくまで著者が興味を感じ、その思考のフィルターを通つただけである。しかしそれである。この本を読んだ人それぞれが、著者の実践の方法に学び、自分なりの地域史の再発見をしていくならば、それでいいのである。日本人ひとりひとりが、

それぞれの観点から地域文化を見つめなおし、自分なりの『交錯の日本史』を編むことができれば、どんなにすばらしいであろうか。

それにしても、日本とは、なんと多様で、なんと魅力に満ちた土地であるのだろう。『交錯の日本史』にみちびかれ、地域文化の再発見に旅立ちたくなった。

山田邦和(天文学部嘱託講師)

宮澤正典編

『日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録 一八七七一
一九八八』

(新泉社・発行一九九〇年六月
A5判・二八九頁 四、一二〇円)

編者の宮澤教授は、イギリス・ユダヤ史の専門家であると同時に、明治以降、現在にいたるまでのわが国におけるユダヤ問題論議の分析、研究者として、内外で著名な方である。

氏は、これまで、同論議にかかわる内外文献を精力的に収集され、すでにその成果は高著『ユダヤ人論考』(一九七三年刊)、

『日本人のユダヤ・イスラエル認識』(八〇年刊)、『増補・ユダヤ人論考』(八二年刊)のなかで、つぎつぎと発表されてこられた。これらを踏まえて発刊されたのが、今回の本書である。

このビブリオグラフィには、過去百十余年間に発表された、日本におけるユダヤ・イスラエル論議に関連する五千五百余の著編書と論文目録が収録されている。そのうち、五一点は主として欧米人の手になる欧文文献である。編者は、「私個人ではその全てを網羅することはとうてい不可能であり、足らざることを痛感している」と、あくまで謙虚な態度を示されているが、ほぼ完璧なものであるといつてよいだろう。

欧米では多くの研究分野において、文献目録の出版は珍しくないが、わが国では本格的なものは、まずお目にかかれなかった。学問水準の低さのゆえか、あるいは、労苦の多い作業を敬遠する風気があるためだろうか。こうした問題についてのさまざまな関心や研究のうえで便宜に資するものとなるならば幸いである」という編者の願いが、ぜひ実現してくれることを期待しよう。そ

れにしても、かくも見事なビブリオグラフィを完成された宮澤教授にたいして、あらためて敬意を表したい。

「日本には……ユダヤ系日本人は居住しなかったし、……ユダヤ人は、事実上観念のなかでしか存在しなかった」が、「ユダヤ論議だけは相当さかんなされてきたし、いまも続いている」と編者は冒頭で指摘し、わが国における特異なユダヤ論議の存在を暗示される。そして、この異様ともいえる論議は、その前史期である一九二一年以前を別にすれば、四つの特徴ある時期に区分できるとされる。本編書の『はじめに』の部分を読めば、明治以降の日本近・現代史の歩みを熟読し、明治以降の日本近・現代史に眼を移してみよう。著者とその文献タイトルから、その論旨が自然と想像できるといったら過言であろうか。本書は単なるビブリオグラフィではなく、ユダヤ問題論議をとおして、わが国インテリの特徴の一面を追求している、まことに奥深い著作なのである。一読をすすめたい。

近藤申一(青山学院大学教授)

小野 哲編著

『政治と国家認識の素材』——昨今の世界を俯瞰する——

(三和書房・発行一九九〇年四月
B5判・一〇八頁 一、〇〇〇〇円)

小野教授は、元来、寡作な方である。その教授が、ここ一、二年のあいだに、『政治論と素材』、『国家論と素材』、そして、ここにとりあげる『政治と国家認識の素材』という、いわば「素材」三部作とでもいうべき本を立て続けに発表された。もともと、教授がものを書かないといっても、これまでに、『政治と権力の理論』(ミネルヴァ書房)や『政治』(大阪労働協会)などの権力論や政治原論に関する著述があるし、P・A・ソーローキンの「平和計画論」に関する論稿などの存在も知らないわけでは決していない。

知らないどころか、私は、右にあげた教授の若い頃の労作の熱心な読者の一人なのである。

とくに、難解とされる田村徳治の「社会史観」は、教授が、敗戦直後に、同志社大

学の学生として熱心に聴講し、その後の政治学研究の方向を決定付けた方法論であるだけに、私もどうかして理解したいと思いい教授の講義ノートである「社会史観ノート」や田村会の方々が中心となつて刊行された大部な「理論行政学」(田村徳治著、中央書房、昭和四六年)もわざわざ買ってかじつてみたことがある。しかし、残念ながら、「社会史観」は未だに歯が立たない。

さて、本書の目的は、「昨今の世界を俯瞰する」という副題が示すように、激動してやまない最近の世界情勢を読むための「素材」の提供にある。そして、「あとがき」にあるように、論評を抑えたあくまでも事実の「認識」に重点がおかれている。しかも、現実の事態に即することで実践に役立つ認識を刺激したいとの野心もあるようだ。唯、著者の意図とは別に、内容も著者の禁欲が守られずに随所に奔放な(?)論断が付け加えられている。とりあげられる主題も相互の脈絡が容易につかみかねる程の拡がりを見せている。もつとも、著者には「脈絡」など、はじめから意に介していいないのかも知れない。それ程、本書は、体裁、内容と

もに一風変わった本なのである。しかし、筆者のみるところ、中心テーマは、東欧の激動とドイツ統一問題にあり、とりわけ、動揺する社会主義の再検討に焦点が定められているようだ。だが、再検討といつても、正面切った考察では必ずしもない。たとえば、『政治学事典』や『社会学辞典』の社会主義の定義を学生と世間をまどわす「迷惑事典」ときこるすので、どれ程、斬新奇抜な社会主義論、いや論を組み立てる「素材」が提示されるのかと固唾を呑んで待っているS O C、T O T、C O P等の略語が頻出し、はてなと面喰つていると「C O P (コーポラチズム=筆者注)」を第二リンチウといひ、育てた人をドコウさん」と言い、「ドコをドウ渡り辿つたのか、リンチヨウは、たぶん渡来のC O P鳥」といった語呂合せに出くわす。

とにかく、真面目につきあえば、肩すかしを食ひ、おふざけかと思えば律儀な叙述(たとえば「国旗」、「小国」、「北欧諸国」に多くのスペースを割く)に出合うといった調子である。こういう本を使つての教授の講義はさぞ愉快であらうなと推察する。と

もあれ、これ程、豊富な実践に役立つ「認識」の素材を提供していただいた以上、やはり、教授御自身によってユニークな現代世界を「俯瞰」する理論を組み立てていただきたい。

かつて、筆者が学生時代に、教授が、社会史観とイデオロギー論を基礎理論として『国家と政策の理論』の構築を約束されたいきさつをよく憶えている後輩がいることをどうかお忘れなく。妄言多謝。

西田 毅 大学法学部教授

内田勝敏編著

『世界経済と南北問題』

(ミネルヴァ書房・発行一九九〇年三月
A5判・三五八頁 四、〇〇〇円)

発展途上国の経済的自立をめぐるいわゆる南北問題は、現代の世界経済体制における核心をなすもので、世界的課題であるといえよう。

本書は、現代世界経済の周辺部内部構造に重点をおいて「周辺部の内部構造をとることだ現代世界経済論の構築」(「はしがき」)をめざした労作で、もともと内田教授を代表者とする本学人文科学研究所の第三

研究(共通テーマ「南北問題の歴史構造」)の三年間にわたる研究成果の一端である。

本書は、一六名の執筆者による共同研究で、第一部「戦後世界と発展途上国」、第二部「世界経済の歴史構造」の二部に分れ、全体で一六篇の論文によって構成されている。第一部は現状分析が中心で、発展途上国の貿易構造、多国籍企業の技術移転と途上国の工業化との関連などについての総論的な考察につづいて、韓国、インド、エジプト、EC、イギリス、太平洋経済圏と円の「国際化」問題など個別領域の問題が検討されている。第二部は、総じて歴史的な視点に立って、キューバ、スペイン、インド・ベنگガル、イラン、ネップ期のソ連、両大戦間期のイギリス、アメリカの諸政策などが丹念に分析されている。みられるとおり問題領域や研究方法がきわめて多岐にわたり、各章の内容を細かく紹介することは、紙幅の制約上とうてい無理で、全体の読後感を述べるにとどめたい。

発展途上国の経済的自立の課題は、端的にいえばかつての帝国主義的植民地政策の帰結であるモノカルチャ構造から脱却し

て、均衡のとれた工業化を達成することにあるが、本書を一読して痛感させられることは、その方策が国や地域によってきわめて多種多様で複雑な様相を呈していることである。われわれは韓国にみられるような輸出主導型のNIEsの発展に目を奪われがちであるが、これは途上国工業化のひとつの類型に過ぎず、たとえばインドのように、発展途上経済「大国」として社会的公正の理念の下に、経済効率や市場メカニズムをある程度犠牲にしながら地域や民族的対立を調整しつつ国民的統合をめざしている国家も存在し、工業化——経済的自立の方途はきわめて多様化しているといえよう。

本書の内容は、どちらかといえば個別領域の分析に力点がおかれ、世界経済体制とのかかわり方の面がやや手すな感もなくはないが、本書を土台としたさらなる研究の進展が期待されるのである。

藤村幸雄(大学経済学部教授)

木地節郎著

『流通業マーケティング』

(中央経済社・発行一九九〇年二月)
A5判・一九七頁 二、六〇〇円

流通に関わる諸々の事象に新しい局面が次々と現われていることは周知の如くである。

しかし、そこから生起する流通業問題の根本的要因として教授は、流通業自体が成熟段階にあり、結果、競争が激化したことを、まず端的に述べるとともに、本書の視角に据える。したがって、革新とマーケティングこそが、このような環境にあつては、経営の基本であるというドラッカーの指摘を踏まえ、本書は流通業マーケティングを戦略的に取り上げることを中心に言及されている。マーケティングはこれまで生産中心に展開されてきたが、教授にあつては、流通業、サービス業等、市場活動ないしは市場行為の主体であれば適用可能であるとするものの、流通業独自の具体化が必要であるという立場が鮮明にされる。

本書における論の展開は、まず流通業マーケティングを戦略的方向性にしたい、基本を明らかにし(第一～三章)、取り扱うべき内容を分化し(第四～十章)、さらに、

個々に分化した内容を再統合する(第十一章)という手法がとられている。したがって、第十一章が再統合のための考え方を示し、最も紙面の中がとられていることも肯首できるのである。

さて、流通業マーケティングの独自性は、基本的には商品の仕入れと販売という点にあるが、メーカーのマーケティングとの比較においては対象が限定され、密度の濃い対応の必要性が力説される。これが意味することは、消費者志向の徹底的な必要性である。したがって、消費者行分析、市場戦略の考え方がまず示される(第二、三章)。以下の章は、この二章を踏えたうえで、取り扱うべき内容が提示されている。例えば第九章業態戦略では、業態変化という取り扱いにくい問題を教授独自の考え方から言及されており、示唆される点多大である。また、第十章では、流通業の経営にとつて、競争への対応のための量的、質的条件である共同化が取り上げられ、共同化の役割の今日的意義が示されるなど、広範囲な内容が示されている。

そして第十一章は前述したように、再統

合化の考え方を、「競争対応」の観点から論じられており、ともすれば偏る傾向にある流通業の経営にとつて、考えるべき点や多くの示唆を含んでおり、必読の章である。本書は、小売業、卸売業に特定せず、流通業として独自性のあるマーケティングの必要性を説く労作であり、浅学なる者への叱咤激励の書である。感謝の辞を表わす次第である。

吉田裕之(大阪商業大学商経学部専任講師)

エスタ・ロウエル・ヒバド著

『ある宣教師つ子の思い出』

(同志社同窓会・発行一九九〇年四月)
(同志社女子大学)
A5判・二四八頁 一、〇〇〇円

本書は、ヒバド先生が日本からご家族あてに出した一〇〇〇通余りの手紙をもとに一九八八年までの先生の人生について、ご自身の記憶をつけ加えて書かれた九章(一、日本で生まれて、二、宣教師の家庭、三、同志社へ、四、太平洋戦争へ、五、アメリカで、六、再び日本へ同志社女子大学の誕生、七、両親の召天と世界旅行、八、仙台、東北学院へ、九、クレアモント・ピル

グリム・ブレイスの日々」と二つの説教が
なる自叙伝です。

これを読むにつれて、私達は七十五年間
(日露戦争、第一次世界大戦、太平洋戦争、
そして戦後)に日本および世界に起った驚
くべき変化に再び注目させられます。

信仰深く人間愛に満ちたご両親とご家族
のこと、ヒバド先生が日本でなされたお仕
事のこと、そして厳しさの中に常に慈愛の
心をもって学生に接しられた先生のお人柄
が、本書を通してひしひしと私達に伝って
きます。

本書の各所にちりばめられている、先生
のご家族、高校、大学時代、同志社女子大
学、東北学院時代、世界旅行、そしてピル
グリム・ブレイスでの生活についてのエピソードは私達の心を温めてくれます。また、
私が日頃抱いていた「ヒバド先生はどのよう
にしてあのように正確で美しい日本語を
身につけたのであろうか」という疑問にも
本書は答えてくれます。

同志社女子大学がリベラル・アーツ・カ
レッジとして発足した経緯を読み、また、
カリキュラムに必修科目として「人間関係

(一年次と四年次に半期ずつ履修)―現在はおか
れていない」を設けられた経緯を読む
時に、コミュニケーションの大切さが強調
され、人間学部、学科が増設されている日
本の現在に鑑み、先生の先見性を強く感じ
ます。また、先生がYMCAその他のボラ
ンティア活動に力を注がれたこと、現在非
常に盛んな女子大学サマー・キャンプの基
礎づくりにご尽力されたことも強く印象に
残ります。

本書の始めに収められている写真の一つ
にあるように、女子大学ではある時期まで、
フアカルティ・ブレイスがあり、ヒバド先生
はそのディレクターをされました。そして、
YMCAでも、東北学院でも、引退後のピ
ルグリム・ブレイスにおいてもいくつかの
劇を演出されていますが、先生はドラマを
演じることによって真の人間性が理解でき、
また美しい正確な言葉が身につけられ
ると信じておられたのではないでしょう
か。

本書を出来るだけ多くの人に読んでいた
だきたいと思います。最後に日本語の翻訳
に携わった卒業生チームに敬意を表しま

す。
小田幸信(女子大学教授)

同志社大学・京都産業大学松井会編
『松井七郎先生をしのんで』

(同志社大学・京都産業大学松井会
発行一九九〇年二月
B5判・六四頁 私家版)

松井先生が亡くなられて一年後の、今年
二月十一日に、教え子達でつくる松井会が
先生を追悼し、発行した文集である。

内容は同志社大学及び京都産業大学の教
え子達(昭和六年〜五三年)や校友、同志
社教会や新島研究会の関係者、先生の家に
寄宿していた人達及びご遺族など、先生と
親しかった幅広い方々の先生のご遺徳をし
のぶ手記。それに、米寿祝賀会の時発行さ
れた先生の自叙伝よりの抜すい、英子夫人
の歌集「梅咲く家」より精選した歌、先生
ご自慢の「京都三山登り」に挑戦した教え
子達の手記、そして最後に、弔辞と先生の
略歴を収録した。

手記の中には、IRC(国際問題研究会)
創設のいきさつ、IRCと特高刑事・名称
変更の経緯、日米学生会議に於る先生の貢
献、軍国主義的な風潮にき然とした態度を

とり、国際主義的精神と同志社のために一貫して尽くされたこと、そして先生の終戦秘話など、同志社の歴史の一部が生々しく語られている。また、常に温顔端正な紳士で、ピューリタニズムとデモクラシーとスポーツマンシップの体現者である先生の人柄と業績が語られ、同志社総長になられる人であったと。

この文集を作成し、改めて先生の存在感の大きさと、敬けんなクリスチャンとしての思いやりや心のやさしさを知った。

写真もたくさん収録した。りりしい先生の写真を始め、ラグビー部の活躍目ざましかった部長時代の集合写真、戦時中の松井家の家族や英子夫人とのアメリカ生活、叙勲や米寿等の祝賀会、滞米中の寄宿生にあてた最期の手紙、そして富岡市の生家にある松井記念館などの写真である。

田島 繁(中学校教諭)

同志社叡峰十年会編

『激動五十年 同志社叡峰十年会卒業五十周年記念誌』

(私家版・発行一九八九年十月)
B5判・二七一頁

「激動五十年」は同志社高等商業学校昭和十年入学の学友が卒業五十周年記念事業の一として刊行された青春の記録である。

青春とは、明るい華やかな生氣に満ちたものであろうか。それとも、もつとうらぶれた陰うつな抑圧されたものであろうか。人それぞれ時代に応じ、環境によって、様々な青春があろう。

ともあれ、七十路を過ぎ、いま、まさに喜寿の祝日がすぐ足元まで来た自分が、そんな年齢になるとは考えてもみなかった。

激動五十年史には、叡峰十年会の諸士が、それぞれの情熱を一生懸命スポーツに又勉学に、傾けた意義ある青春の思い出を残しながら、洛北を去って、既に五十有余年の歳月をふり返られ、悔いることのない人生に満足感が溢れ、余生を如何に楽しく過ごすかという事が、詳らかに記してあります。例えば、皆さん自由の学園に辿り着いて夢にまで見たであろう、長髪の姿を残念にも入学一カ月足らずして、一瞬にして破られたあの長髪禁止令を受けたショックの如

何に大きかったかが、書かれています、当時、何故、吾々二、三年生には禁止令が出なかったのか、今だに不思議でなりません。

五十年史を読みつゝ、喜びがひしひしと胸を、うつものが感じられます。今尚五十年経つても鮮やかに網膜に残っているのは、あの比叡オロシの岩倉の冷え冷えとした大気の中に広がる美しい山並であり、殊にその晩秋の夕暮れの光景のすばらしさが思い出されてならない。

西の彼方に日が落ち、岩倉原頭を薄靄が覆い、山々は薄蒼く寒々とした影となつて連つている。懐の寒い時には空腹感と密接な関係があつたと思われる、空腹であつたればこそ山々は、一際清浄に崇高に目に映えたのだと思う。

それぞれ、表現は異なつていても、青春の思い出は、実に尊いものであり、清いものである。その情熱と理想は、同志社高商の伝統というものである事を誇りとして、力強く胸に抱き続けられた姿が伺えて満腔の敬意と讃美を捧げ度いと思います。

最後に記念誌刊行並びに鷲尾校長先生の

「告別」書簡の再表装→同志社社史資料室
正式登録保管に関して、担当された諸士の、

すさまじい情熱と懸命の努力のもと完成さ
れたものと、その労を心から搞います。

大隈幾久馬（一九三七年同志社高等商業学校卒業
西部扶桑機工株式会社取締役社長）

新島襄全集編集委員会編

新島襄全集 全10巻

●刊行にあたって

新島襄（一八四三—一八九〇）の四十八年の生涯は、キリスト教に培われた西洋の精神風土を移植し、教育・啓蒙によつて有為の人材を輩出せしめ、物心両面における日本の近代化を推し進めることに捧げられた。当時の富国強兵策とは全く異なつた方途で、真の近代化を模索したといえる。同志社はその一大結晶であり、数多の英才・俊才を世に送るとともに、実業・思想・研究・精神面で有形・無形の貢献を今も重ねている。

同志社には膨大な量に上る新島の遺稿が襲蔵されている。それらを纏めて刊行することは、同志社長年の念願であつたが、ほとんどが草稿・断篇の類であり、整理・編纂には甚だ困難を伴つた。本全集は、積年の成果によりその困難をのり越え、同志社以外のものも含めて新島の全遺稿を校訂し、分野別に全十巻に集成した。近代日本黎明期における、偉大な思想家にして実践家、教育者、キリスト者である新島襄の全貌が、ここにおいて初めて提示される。近・現代史、思想史、教育史、教育学研究者、教育関係者、キリスト者とも、近代日本の礎に興味を抱く一般諸書家にとつても、待望の全集である。

同朋舎

全10巻 内容

- 第1巻 教育編 (河野仁昭)
- 第2巻 宗教編 (高橋 虔)
- 第3巻 書簡編Ⅰ (杉井六郎)
- 第4巻 書簡編Ⅱ (杉井六郎)
- 第5巻 日記・紀行編 (河野仁昭)
- 第6巻 英文書簡編 (オーテス・ケリー)
- 第7巻 英文日記・紀行編 (オーテス・ケリー)
- 第8巻 補遺・雑纂編 (河野仁昭)
- 第9巻 来簡編 (杉井六郎)
- 第10巻 新島襄の生涯と手紙 (北垣宗治)
- 「A・S・ハーデー著」ゴシックは既刊、（ ）内は責任編者
- 菊判・上製クロス装 貼箱入
- 本文9ポイント一段組

（株）同朋舎出版 本

社 〒600 京都市下京区中堂

同志社収益事業課

電話 (〇七五) 寺鍵田町二
振替口座 京都市上京区今出
〒602 川通烏丸東入
学校法人同志社内

電話 (〇七五) 二五一三〇三八